

ふるよとから挑戦

第48話 本物の誇り ⑤

(敬称略)

住宅事情の変化や信仰心の薄れからか、最近では若い世代を中心に仏壇を置かない家も増えてきた。高い技術力で信頼を集める美川産地も、この逆風と無縁でない。職人たちは、伝統の技を磨きながら、新たな需要を掘り起こす取り組みも求められている。

小さくして残す

今年5月、「佛壇の山本」(能美市)の山本洋司(51)の元に、一人の中年女性が訪れた。小松市出身で埼玉県に暮らしているという彼女は、心配そうな口調で切り出した。「うちの仏壇、捨てないといけないでしょう」。

父母が亡くなり、実家に残された大きな美川仏壇。受け継ぎたい思いはやまやまだが、マンションには置く場所が確保できない。思いあぐねて、相談に訪れたのだった。

山本は、仏壇の「サイドダウン」に挑んだ。新たに作った小さな仏壇に、古い仏壇から取り出した前柱や引き出しなどを配した。父母が生前、誇らしげに説明して見せた時絵や箔の美しさもそのままに。「こんなに残してくれるなんて」。女性には感激の面持ちを浮かべた。

山本は、小型仏壇や厨子など、都市型住宅に合

伝統そのままに 小型商品を開発



わせた商品開発に力を注ぐ。厨子のデザインに漆芸家の作品を取り入れ、2005(平成17)年にはグッドデザイン賞を受賞した。「手を合わせたい、そばに置きたいという気持ちをお大切にしたい」。仏壇の新たな形を

模索し、行き着いた先がこれだった。

安価な仏壇開発

「本物」の素材と技術を守る美川仏壇は、値引きやコストダウンの難しい品物でもある。しかし、贅を尽くした品物を求め

る客ばかりでない。「金のないものに、美川仏壇は買えんのか」。こうした客の声をきっかけに、2000(平成12)年、若手職人が中心となって安価な仏壇の開発に取り組んだ。目指すは、100万円以下の商品だ。

もちろん、美川の持ち味であるこだわりの素材や丹念な下地、塗りなどの作業工程を省く

引小仏壇の柱や引き戸を利用し、型に作り替えた町井寺美能一壇

わけにはいかない。職人たちは、部品が取り外し可能なホゾ組み立ての利点を生かした。従来よりも少ない部品で製作し、予算に応じて部品を継ぎ足せるようにしたのだ。

開発した80万円台の仏壇は、人気価格帯の一つになった。「伝統にあぐらをかいたらダメや」。職人衆にとって、客の要望に耳を傾ける大切さを痛感する機会にもなった。

美川の産地には今、幾度となく訪れたピンチをチャンスに変えてきた自信が漂う。守り抜いた「本物」の誇りが輝きを増すのはこれからだ。

(藤本典子)

(第48話おわり)